

研究ノート

垂加神道における「祈祷祓」と「神」 —跡部良顕を中心として—

ハン デンシ (樊 传榮) *

1. はじめに

跡部良顕(1658—1729)は、江戸での垂加神道を普及した中心人物として知られている。伴部安崇を始め、佐藤直方、浅見綱斎、正親町公通、玉木正英など崎門朱子学と垂加神道の代表的な学者らに師事し、儒学と神道を学んだ。そして、山崎闇斎の文集である『垂加文集』及び続編を出版することに尽力しつつ、神儒兼学を唱えた¹。良顕に対して佐伯有義は「垂加神道の江戸に伝はったのは、延宝の末年と思はるるが、大に盛になったのは宝永以後で、これは主として跡部良顕、伴部安崇二人の力であると思われる。(中略)垂加霊社の首唱した神儒の正旨を奉じて、終生之が発展に努力し、殊に尊王の心深く、南山編年録を著して、正潤を明らかにし、神に皇に至誠を以て奉仕したる精神と功績とは、実に欽慕すべき次第である」²と高く評価している。

他方、良顕の出版活動について、小林健三は、「垂加神道を最も通俗的に宣伝した功績は蓋し門流中第一に居るといはなければならぬ」³と条件付きで評価した。実際のところ、良顕は山崎闇斎の神道思想に傾倒し、神道の実践的な側面を重視して神儒兼学の立場から神道理論を構築し、特に、神道を日常の中で持続することを提示している。しかし、良顕の神道実践と神の観念との関係について、先行研究においては説明が不足しているという印象が免れ得ない⁴。そこで拙稿は良顕の神道の実践である「祓・祈祷」と「神」の関係を焦点として、良顕の著作を通じ、良顕における垂加神道の実践の理解を分析してみたい。この検討を通じて良顕の思想的な研究の補充はもとより、「神」と日常生活の中の神道実践から先行研究に少しく知見を加えることもできるであろう⁵。

* 東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室博士後期課程

2. 神道と儒教

先述の通り、良頭は神儒兼学の理念を奉じ、神道を中心とする方法論を唱えている。良頭の「神」の観念を検討するため、先ず良頭の神儒兼学について確認してみよう。良頭は『神道軍伝書』の中で次のように述べている。

西土ノ聖賢ノ教天地人倫ノ道理ニシテ天人合一ノ説ナリ、コヽヲ以テ神道ト自ラ妙契スサレバ、日本ノ神聖ハ西土ノ聖人ニ勝リ、神勅ノ教勝レタルヲ多シ、コレニヨリテ神道ヲ根本トシテ、儒道ヲ輔翼トスヘシ、⁶

つまり、西土の聖賢の教えは人倫の道理を示し、天人合一の説である。そして、それは西土の聖賢の教えは神道と合致することが多いのである。しかし、日本の神勅が西土の聖賢の教えより優れたところが多いため、神道は学問の根本としてあり、儒教は神道を補佐するものと位置づけられる。これに対し、仏教については良頭の著作『神道排仏説』の中で、仏教に対して「天竺は風土清からず仏道は人倫の法にあらず」と批判が加えられる。そして、良頭は「儒道は西土の教なりといへども、天人合一の説にして、神道と妙契すれば、仏を屏るも同じこと也」⁸と述べ、「儒道」を「西土の教」として認識するとはいえ、「天人合一の説」であり、神道と「妙契」すれば、仏教に抗うことができると判断している。良頭は儒教的な倫理観念について、普遍的な価値を持っている「天人合一ノ説」として説明し、神道の教えと一致することを認めている。「妙契」において良頭は、西土の聖賢の教え（儒教）と神道が自然と符合するといっている⁹。しかし、良頭は神道の教えが儒教より優れたところが多いと考えている。松本丘によれば、闇斎においては神儒が究極において一致すると認識していたが、それぞれ独自性を有する神道と儒学との、いわば緊張関係を保持することを意識したと指摘している¹⁰。そして、良頭は神道が学問の根本であり、儒教が補助の手段として捉えている。これに対して良頭と同じく渋川春海に従って神道を探求する谷秦山は、「吾モ人モ日本ノ人ニテ道ニ志アルカラハ、日本ノ神道ヲ主ニスベシ。其上ニ器量気根モアラバ、西土ノ聖賢ノ書ヲ読テ羽翼ニスルゾナラバ、上モナイヨキ学ナルベシ」¹¹と述べているが、秦山は神道を研究する上で、器量、根気、能力（「器量気根」）もあれば、「西土ノ聖賢ノ教」を読み、「羽翼」にするのも大いに良い学びとなると述べている¹²。秦山と比べれば、良頭は、神道と儒教ともに重視している。儒教は学問の上で重要な補助材料である。そのような考え方に基づいて、良頭は神道

の理論と儒教の概念を比較的に説明している。それに関して、儒教の天命について次のように良頭は述べている。

神道ト云ハ垂加翁曰、道日神之道、教猿田彦所導也、此言神道ノ根本ナリ、神道ハ惣テ日徳ヲ以テ説クヲナリ、是ニ依テ高日シラレヌト云、儒道ニテ天命ト云ト同然也、¹³

神道の意味について、良頭は山崎闇斎の言説を援用し、「道は日神の道、教は猿田彦導く所なり」¹⁴と説明する。神道の本質は日神の徳を唱える学説であり、儒教の天命と同じ意味である。つまり、良頭は、儒教の天命を神道における「高日シラレヌ」にあてはめている。良頭は、「高日シラレヌハ知ラレヌ事ナリ、身ヲ省ミテ天神へ祈へ祈リ玉フヲ」¹⁵と説明し、「高日シラレヌ」の核心的なポイントは自身を省みて、神に祈ることだと解釈している。このような理解にしたがって、良頭は儒教の天命を神に祈ることと考えている。そして、良頭は天命について次のように述べている。

儒者トイヘハ天命々々ト云テ、神ヲ祈ルヲ説ス、神ヲ祈テ命ノ改ルヲモ知ラス、朱子ノ雨ノ晴ヲ祈リ、雨ヲ請フノ祭文、文集ニ見ヘタリ、是天神へ祈リ玉フヲナリ、如斯聖賢ノ祈多シ、永雨モ旱モ、皆時ノ変、天命也トカマハスニ置ト云ハ、聖賢ノ心ニアラス、周礼、儀礼ニ神ヲ祭り、祓祈禱ノヲ詳ニ見ヘタリ、周礼ヲ朱子ノ此書ハ天理爛熟ノ書也ト尊信シ玉フ、周公ノ政ニテ、司徒之職、典樂之官ハカリニテハ人ヲ治メ玉ハス、大祝小祝女祝男巫女巫ノ官ヲオキテ、天人ノ邪氣ヲ祓ヒ祈ラセ玉フ、¹⁶

良頭は当時の儒者がよく天命を繰り返し主張するとはいえ、神に祈ることを知らないことを批判している。良頭は、朱子が降雨を祈ることに注目している。朱子の祭祀について、陳榮捷は朱子が神に祈るのは、単に神の加護を信じ切っているのではなく、まず人事を尽くすことを重視するためと説明する一方、陳榮捷は朱子の宗教実践に対する情熱を無視することができないと指摘している¹⁷。良頭は、儒教の祭祀に注目し、天地異変における儒教の対応、特に祭祀の重要性を注目する。良頭は、周礼、儀礼の祭祀と神道的な祓祈禱と同一視し、儒教の祭祀も重視し、神道と接近する可能性を見出している。そして、良頭は、神道と儒教の本質について、次のように述べている。

身ヲ省ミテ天神へ訴へ祈リ玉フヲ、神聖ノ御心至徳ノトコロ深ク思ヒ知ヘシ、神道ノ深意、後世ノ教トナルヲナリ、儒道ニモ妙契スルトコロアリ、トイヘト近來ノ儒者格物致知ニオロソカニシテ、理屈ハカリニ拘リ、神ヲ祭ルヲハ考ルモノナシ、悲ムヘキ事ナリ、¹⁸

良頭は、人間が自分の罪を反省し、神に祈るという方法が、神道と儒教とともに含める普遍的なものとして認めている。しかし、儒者は空理だけを議論して神道と儒教の本質を理解しない状況について、良頭は慷慨している。以上のように良頭は単に理論的な知識より実践を重視し、この実践の方法論の核心として神に祈ること、あるいは日常生活の中の神道実践の重要性を唱えている。良頭にとって、そもそも神は如何なる存在であろうか。次に良頭の神の概念を確認してみよう。

3. 正神と邪神

良頭は天命を説明する際に、神について次のように説明している。

神明不測ノ根元ヲ知スシテ天命ヲ云フ愚カナル事也、天命ニ吉凶禍福招テ来ルヲアリ、邪氣合シテ来ルヲアリ、不意ニ来ルヲアリ、皆是天命ニシテ正不正アリ、スヘテ神ノ命シ玉フ事ナリ、神ニ正神アリ、邪神アリ、然ルニ儒者ハ天下ハカリ云テ神ヲ云ハス、蒼々タル天ハ何ノ妙アラシヤ、¹⁹

良頭によれば、人々は神明不測を理解せず、ただ天命を主張することは愚かな行為である。天命は吉凶禍福を招き、神の働きにより形成されるものであり、儒者が主張する自然現象の天ではない。良頭は神明不測の根源が分からない状況で天命を説く行為を指摘し、神を無視する儒者を批判している。天命は直接に吉凶禍福と関わる。しかし、天命は正と不正を併せ持つものであるが、それらは、は正神と邪神により決定されるのである。続いて、良頭は以下の様に述べる。

夫天地ノ間皆神道ナリ、然レト正神アリ邪神アリ、其妙用同シキマウナレト、正神ノ妙ハ正シク、邪神ノ妙ハ邪ナリ、詳ニ弁ヘサレハ、正邪ノ差別ナフシテ、大ニ心ヲ迷フモノナリ、古今常人ノ迷フトコロ、神道者儒者モ朋カニ道理ヲ弁ヘ知サルモノハ、迷フ者多シテアケテカソフヘカラス、²⁰

天地の間で全ての現象は神道と関係している。しかし、正神と邪神の区別があり、弁別しなければ、学問の真意を理解できない。一方で、世の中で、そのような人間は多く存在する。これについては、神道家と儒者も免れないものであり、良頭は、儒者だけではなく、一般の神道家を含めて批判している。良頭は、正神邪神を学問の深層の意義と繋がると思え、学問において核心的な位置を占めると考えている。なお、正神邪神の概念は良頭の特独な発想ではなく、垂加神道の伝統に潜んでいる概念と考えられる。山崎闇斎学派の正神と邪神については、山崎闇斎の『会津神社志序』にさかのぼることができる。良頭は『正神邪神論』のなかでその「序」を引いているが、その当該部分は次の通りである。

抑天下万神御中主尊之所化、而有正神有邪神何耶、蓋天地之間唯理與氣、而神也者理之乗氣而出入者、是故其氣正則其神正矣、其氣邪則其神邪矣、人能靜謐守混沌之始、祓邪穢致清明正直而祈禱則正神申福焉、邪神息禍焉、豈可不敬乎哉、²¹

闇斎は、「そもそも世界の中ですべての神は天之御中主神による生成するのが、なぜ正神と邪神が存在するのか。蓋し世界の間でただ理と気があるのみ。そして、神は理の気に乗じて出入する者である。ゆえにその気が正しい気であれば、神は正しい神であり、その気が悪い気であれば、神は悪い神である。人はよく静謐にして混沌の始を守り、邪穢を祓い、精明になる。そして、正直にして祈禱すれば、正神は福をかさね、邪神はわざわいを止む。敬みをしなければならない」と説明する。

闇斎は、天地の間は理と気のみであると説いている。そして「天地之心」である神は、すなわち天御中主尊の御霊＝心神は、気に乗って出入するため、気が正しければそれを受ける神は正しく、気が邪なればそれを受ける神は邪である、と説明している²²。闇斎は、人間が「混沌の始」（混沌之始）を守って神道の礼儀を実践すれば、福を獲得して禍を免れると考えている。そして、闇斎の正神邪神の理解は朱子学の理気論及び鬼神観と繋がると考えられる。朱子学によると、万物は理と気によって構成しているが、鬼神も例外ではない。『朱子語類』は鬼神について、次のように述べている。

問、道理有正則有邪、有是則有非。鬼神之事亦然。世間有不正之鬼神、謂其無此理則不可。曰、老子謂、以道莅天下者、其鬼不神。若是王道修明、則此等不正之氣都消鑠。²³

(ある人は) 問う、道理は正しい道理があれば、正しくない道理がある。是があれば、非がある。鬼神のことにしても、このようなことがある。世の中で、不正の鬼神がある。この道理がないと言われることができない。(朱子は) 曰く、老子の言うように、道をもって天下に臨めば、鬼神は不思議な存在ではない。(為政者は) 王道を修めば、すなわちすべて不正の気が無くなる。朱子は世の中の道理には「正邪」「是非」が存在し、鬼神も同じように「正邪」、「是非」を持つと考えている。ついで、朱子は「不正之鬼神」、いわゆる「不正之氣」を消散させることができると考えている。その方法は「王道修明」である。朱子は人間の王道を修ることが「不正之鬼神」の解決手段であると認識している。鬼神は最終的に人間の問題として回収されている²⁴。良頭は神における気の側面に注目し、次のように述べている。

神ハ理ノ生テアルヲ云、故ニ氣ニ乗シテ千変万化ノ妙用ヲナシタマフ、氣ヲ離レス、氣ニ接ラサルモノナリ、此神正直ニシテ邪ナシ、然レモ氣ハ清濁アリ、正アリ、邪アリ、其氣ハ陰陽五行ナリ、氣清ク正シケレハ乗スルトコロノ神モ正シク明カナリ、氣濁リテ凝ハ其神カクシテ邪トナル、²⁵

良頭は、神は「理ノ生テアル」と理解している。朱子学によれば、理は、性（人間の本来態）として万人に内在することで、万人の自力による本来の完璧な人格を獲得する根拠である。そのような朱子学の考えに基づいて良頭は、「いきてある」理、即ち神の万人への内在を説く²⁶。しかし、万物が気によって構成される以上、気がなければ普遍的な準則である理のみ存在することは不可能である。気は正邪の区別が存在する。ゆえに、神にも正邪の区別が存在している。良頭は人間を含む世界の万物の主宰を神として捉え、朱子学的な「王道修明」と対照的に神の力による自己実現の方法に傾斜している。良頭は、その具体的な方法は「祓祈祷」と提示している。

心ノ神明正シク明カナリトイヘモ邪氣ニ侵サレテ居ナリ、薬ヲ用ヒ或ハ祓祈祷スレハ、又本ノ如ク正シクナルナリ、(中略) 宮社ニ正神メ、祭り置タテマツルトコロニハ、真ノ心ヲ以テ正シキヲ祈レハ、必ス感応アリ、其意ハタシカニメ、末々マテ変ルヲナク、其神恩ヲ受得テ正シキナリ、邪ナルヲ祈レハ、却テ罰ヲ蒙ルモノナリ、²⁷

人間は自分の主宰である神が本来の姿を恢復するために、邪気を排除しなければ

ならない。その方法は「薬ヲ用ヒ」と「祓祈祷」と考えられている。良頭は特に「祓祈祷」の時に、正神に対して感応することを強調している。人間は祭祀の場所で正神を祭る時に、本心より自分（内在の神）の本来の姿を恢復することを祈れば、神の力による完璧な人格を獲得することができるが、邪神に祈れば、必ず罰がある。良頭は、邪神を信仰対象として祭祀することを批判し、次のように述べている。

或ハ観音ヤ弁財天ヲ祈テ、富貴ヲ得ル者アリ、是邪氣邪神ニ感スルユヘナリ、サルニヨツテ、一度富貴ニナルトイヘ、後ニハ悪キヲ多ク禍ニ遇フ、皆是不正ノ命也、真ヲ以テ正神ニ祈リ、幸ヲ得ルハ正命也、天照大神ノ託宣ニ除万事雜説、挙一心定準、孔子ノ如浮雲、又雖執鞭之士我亦為之ノ語アリ、心正シク真アレハ、幸不幸皆正命ナリ、²⁸

良頭は、人間が邪神を崇拝し、邪氣・邪神に感応することが「不正ノ命」に導くと考えている。良頭は、邪神に信仰する場合は、一時的な利益を獲得するとはいえ、必ず禍を受けると考えている。正神による正命を獲得するためには、心を正しくし、自身の運命を泰然に受け止めるべきであり、要するに、良頭は、利益より人間の本来の姿（内在の神）を認識することが信仰の意味であると考えている。

では、邪神とは何か。前掲資料 27 の中で、良頭が観音と弁財天を邪神として認識していることが確認できる。良頭は、邪神について、次のようにまとめている。

観音仏弁財天ノ如キ様々ノ仏ニ願ヲ立祈ルモ、皆邪氣ヲ以テ邪神ニ感スルナリ、（中略）深海幽谷大海ノ中ニ様々ノ奇怪ナルモノアルモ氣ノ凝タル邪神ナリ、（中略）人家近キ所ニテモ狐狸ノ化テ奇妙ヲナスモ邪ナリ、²⁹

良頭は、①仏教の諸仏と諸天、②信仰の対象としての動物、③奇怪なるものを邪神と認識している。良頭は、邪神が出現する原因が仏教の流行と考え、次のように述べている。

神道衰ヘ仏法盛ナレハ、自ラ邪神多ク、正神ノ告ハ稀ナリ、稻生ノ身体ハ保食神ニシテ五穀ノ神靈ナレハ、人ノ生命ヲ守リ玉フ神ナリ、ソレヲ狐トアヤマリ、狐神体トナリ、様々ノ奇妙ヲナス、其外蛇ヲ神体トナシヲクトコロモアリ、或ハ彼ノ小祠ノハマリ神、此ノ堂ノハマリ仏トテ尊ヒ仰クヲ悲ムヘキ事ナリ、³⁰

良頭は、神道が衰え、仏教の流行によって正しい信仰の対象である正神が人々の崇拜を失うことを批判している。特に、良頭は稲荷の神体である保食神が狐として認識される社会状況を批判している。保食神について、良頭に影響を与えた神道家である玉木正英は、「日神蒼生ヲ恵思召カラ、ソレヲ養フ所ノ衣食ノ道ヲ立ント思召ニ、幸イ保食神耕作ノコト織紵ノコトニ功有ト申コトヲ聞召及テ、月神ヲ相傳ニ遣サルハ。ソコデ保食神、山海川原ヲ馳旋リ、種々ノ珍物ヲ取調饗応有ルゾ。(中略)此日神蒼生ノ為ニ衣食ヲ恵ミ玉フ。」³¹と説明している。天照大神は人間の衣食を維持するために、月神を保食神のもとへ派遣している。良頭は、保食神が衣食を司る神とし、稲荷と同一視している。保食神は五穀の神であり、人間の命を守る重要な神である。しかし、このような重要な神の神体を当時の人々は狐と誤認している。他、蛇を神体として祭ることも存在している。

これに関して垂加神道における動物観について、垂加神道の継承者である正親町公通は、「狐の事、稲荷の使者也、総て使者は其の神徳に叶鳥獸を云、狐は五穀を守るものゆえ也。五部書に三狐神とあるより云、人を化すは、人にも善悪ある如く、狐にも人を化すは狐の中をよくなき狐也。さやうな狐は御意には入まじき也」³²と述べているが、公通は鳥獸を神使として認識し、狐が稲荷の使者であり、五穀を守り、善悪の区別ある動物と理解している。しかし、狐に善悪の区別があるため、公通は鳥獸に神の使者としての機能を認めつつ、完全に否定しない態度を示している。そして、公通と出雲路信直は、猿の像を造り、垂加神道の中で尊信されている猿田彦として祀っているが、この行動について、渋川春海は、「公通卿及出雲路。作三猿拝之。為猿田彦之神像。恐非礼也。何以猿田彦為禽獸耶。雖合混沌之義。吾無取焉。(正親町公通卿と出雲路信直公は三猿の像を作り、この像を崇拜する。猿田彦の神像を作ることとは、おそらく礼に符合することではない。なぜ猿田彦を禽獸として認識するのか。混沌の義に合致するとはいえ、私はこのような事をしない)」³³と批判している。そして良頭は、渋川春海と同じように、神を動物と混同する行為を認めない。神像を拝することが開斎の意図ではなかったと考えている³⁴。

良頭にとって正神は神道の神であり、特に天御中主を重視している。前述の通り、良頭は開斎の考えに従い、人間が天御中主の分身を受け、完璧な人格を持つと考えている。良頭は、完璧な人格の所有者と禽獸とを混同することを決して認めない。本来人間に内在する神(天御中主の分身)はその上で気の原因より本来の姿(天御中主)ではない。良頭は、人間が本来の姿(内在の神)を恢復することが学問の第一義として捉えている。内在の神を自覚するために、正神に対する感応は重要な方法である。

このような自己実現の方法を、良顕は次のように述べている。

凡ソ人間ト生出ル初シテハ貴キ賤キノ隔ナク一面ニ天御中主ノ分身ヲ受テ来ルユヘ、時々刻々ニ其神靈胸中カラ光リヲサシテ、御指図ガアレドモ彼集リテ吾形トナル五行ノ氣ノ悪キカタマリ又ハ一分ツリタル所カラ罪咎ガワキ出テ、遂其神勅ヲ背キテ悪ヲナスコトナリ、ソコヲ神カラ頼ミ氣質ヲ變化シ、其罪咎ヲ祓ヒテ、神靈ノ勅命ニ従ヒテ生自神ニナルヤフニト願フベキコトゾ、³⁵

良顕は、人間に貴賤上下の差別なく、天御中主の分身を受け、常に心の中で輝いているとする。しかし、五行の気により神を隠されてしまい、人間とは、神勅に背き悪事を行うものである。そのため、良顕は、神に頼って罪を祓うことを期待していた。田尻祐一郎によれば、抽象的な理ではなく、具体的な神格が、自らの内にあって生き生きと働いている、このような実感に、良顕は究極のリアリティーを求めた³⁶。良顕は、「神ハ理ノ生テアル」と唱え、客観的な倫理としての理ではなく、気を通して生命力を獲得する神を重視し、正神への信仰により完璧な人格となることを信じていたのである。

4. 「中良振」

良顕は正神に対する信仰を学問の核心として確立している。しかし、どのように正神に感応することができるのか。良顕は次のように述べている。

仏法は人身の迷とし、地水火風空と説きて、喜怒哀楽の情を滅し、真如の空を仏性とす。猿田彦大神曰く、未だ見ず未だ聞かず未だ言わざる渾沌の前を照す、是一身土金の渾沌にして、日徳の光明具る、則ち中の正直なり、其の本心見つ聞きつ言ふに及びて、物に触れ動き出づるを情と云ふ、情は則ち喜怒哀楽なり、内外清浄なれば情の発する処節よくして神の道にあたる、是を中良振と云ふなり。氣質の穢れにて節よくあたざれば中良振ることを失ふ、是神は氣に乗じて行ひ玉ふ処なり、気を滅して何ぞ神あらんや。³⁷

まず、良顕は、仏教が喜怒哀楽の情を滅ぼすことにより「真如の空」、いわゆる仏性を獲得することを批判し、喜怒哀楽の情の重要性を唱えている。そして、良顕は、

猿田彦の言葉である「未だ見ず未だ聞かず未だ言わざる」という状態が人間の本来の姿として捉え、内在の神が輝くところであると考えている。その本心を保持し、内外清浄（心と身体）を維持して正しい情（処節よくして神の道にあたる）を発すること、を学問の要点とする。一方、闇斎は、内と外の清浄は厳密に区別せず、心身の清浄であると考えている。闇斎は、身を祓わなければ、正神は宿らず、逆に邪神が宿ると考えている³⁸。良頭は内外の清浄から正しい情（喜怒哀楽）を発動することを「中良振」と考えている。しかし、気質の穢により、「節」を当たらない場合は、「中良振」を失ってしまう。

良頭の論述によれば、「中良振」は人間の意識を発動する際に、それ以前の完璧な状態を維持して正しい情を感じることであり³⁹。前掲の資料を通して、良頭は、「渾沌」の状態は人間本来の状態と考えていることが分かる。「渾沌」は伊勢神道五部書にすでに確認され、天地を形成する前の状態を形容する言説であり、存在の始まりである⁴⁰。猿田彦の言説は、『玉籤集』、『中臣祓風水草』など垂加神道の著作の中で記録され、人間の修養を示している。垂加神道において、「渾沌」から「開闢」への展開は歴史における一過性の出来事なのではなく、すべての存在の構造として考えられる。そして垂加神道における根源の神は、形体をもたないが働きのある実体であると解釈でき、「渾沌」ということから、神の働きを律動するものをたえず再生・更新して無限に持続するものと理解することができる⁴¹。「中良振」によって正しい情とともに、「渾沌」を感じることができる。注意したいのは、「中良振」の働きは情の発動、いわゆる「物に触れ動き出づる」ことから離れず、独立して存在することができない点である。良頭による仏教批判の理由は、仏教が情を絶することと考え、日常生活から離れる宗教実践を認めないためである。また、良頭は特に重視する『天人唯一神道之伝』の中で、次のように述べている。

人曰此中臣中ハ土金心柱正直ノ意ナリ、天兒屋命日神ヨリ神道ヲ授リマシ／＼テ此道ヲ得玉フ、是ニヨリテ中臣ト云也、皇神ノ御中皇孫ノ御中ト云ハ正直ノ道也、又皇神皇孫ハ君也、八百万ノ神ハ臣也、其中ニ立テ君臣ヲ和シ、天下ノ政ヲ執行玉フ、是中良振ナリ、⁴²

良頭は中臣の「中」は垂加神道の重要概念である「土金」を持続することと考えている。「中」は天兒屋命が天照大神からいただき、後世に伝わる。良頭は、天孫が君であり、八百万の神が臣であるとし、君臣の調和を求めている。そして良頭は、日常

生活の中の神道体験を踏まえつつ、中良振から神道における理想的な政治論を論じている。良顕は、「中良振」及び神道的な実践と天命について、次のように述べている。

神道ニ土金ヲ以テ其身ヲ敬ミ、内外ノ穢レヲ祓ヒ清浄ニナシ、心正直ニシテ、内外混沌ト成テ、神光照海ニシタカヒ、中良振テ以テ日用ヲ行ヒ、神明ノ観応ヲ祈リ、天人唯一ノトコロヲヨク呑コミ、幸来レハ悦ヒ、不幸来レハ祓ヒ祈テ身ヲ敬ミ、天命ト云テ捨置ヌ、患難死ニ至ルト云ヘト、命ノキハマルトコロハ心ニ疑ハスシテ、ソレノニシタカフ、程子曰、人事所尽是命也ト、此語神儒相通スルノ格言ナリ、

43

良顕は、神道が身の修養を重視し、祓いを通して内外の清浄を求め、内外（心と身）が本来の姿を恢復することを信じている。「中良振」を日常生活の中で応用して、神との感応を求める。神道を実践する場合は、終始に天命を忘れず、どんな困難にあっても、本心を維持することを求めている。良顕は、程子のことばである「人事所尽是命也」を引用し、儒教が神道と共通すると説明している。神儒兼学を踏まえ、良顕は次のように述べている。

西土ノ聖賢ノ道ニテモ天命之謂性並性善之云明々徳ノ沙汰面白ケレドモ、性善ト云明徳ト云テホメタ計リテ是ヲ吾物トシテ祭ルコトヲセヌユヘ、氣質ノ悪キモ自分ノ力ニテ直サフトカカツテ、悪人ガ大善人ニナツタハ見ヘヌゾ、日本ノ教ノ勝レタルト云ハ兎角神ヲ願デ氣質ノ直ルヤフニト祈ルユヘ、素戔嗚尊ノ如キ大悪神モ後ニハ大聖神ニナラセ玉ヒテ、少シモ元ノ悪キ氣質ガ残ラサリシゾ、⁴⁴

良顕は、西土（チャイナ）の聖賢の教え、いわゆる儒教の修養法を重要な方法論と認めている。しかし、「天命之謂性並性善之云明々徳ノ沙汰」と表される、人間が自身の努力を通して自身の「氣質ノ悪」を完全に取り除き、完全な人格を獲得することは良顕としては到底考え難い。良顕は、人間が神に祈ることを通じて自身の「氣質ノ悪」を除いて本来の人格（内在の神）を再び輝かせられると考え、人間の主動の働きより正しい神に頼ることを信用している。良顕は、神道の優越性について、次のように述べている。

今日神道ヲ修行スルノモ汚穢不浄ノ身ニシテ、其促清浄ナ位ニハナラズ、毎日々三科祓中臣祓ノ類ヲトナへ、土金ノ工夫祓祈祷ノ修行ヲツツシミ、神カラ以テ氣質ヲ変化スルヤフニ祈ルコトナリ。是カ則神道ノ西土ノ教ニ勝ツタ所ゾ、⁴⁵

人々は日常生活の中で神道を実践し、自身の穢を浄化する。人間は神道の礼儀を実践すれば、神の力によって自身の氣質を変化させる。良頭は、人間が本来の理想的な姿を恢復するために、日々の神道の修養を要求している。良頭は、『三科祓』、『中臣祓』など「祓祈祷」を修行することを通して人間が内在の神を認識することができる指摘している。これを実現するために、毎日神に対する祈りを要求している。

5. おわりに

拙論は、垂加神道における一つの課題である、「神」と神道の実践とのつながり及びその具体的な展開について、跡部良頭の著作を通してに分析することを試みた。以下に要点をまとめておきたい。

良頭は、神道と儒教は根本的な道理が一致すると考えている。良頭は、閻斎の思想に従い、この現象を「妙契ス」として解釈した。そして、神道と儒教の実践の中で神の重要性を強調している。良頭は閻斎の正神邪神に対する議論に従い、朱子学の理気論に基づき神には正神と邪神とが存在するものとしている。朱子学の考えによれば、すべての存在は気によって構成されるものであり、それは正しい気と悪い気が存在するのである。正しい気によって生成した神は正神であり、悪い気によって生成した神は邪神である。良頭は、正神は天御中主を中心とする神道の神として、邪神は仏教の諸仏、動物、妖怪と定義する。良頭は、正神邪神論を通じて仏教を批判し、神道（及び儒教）を擁護している。良頭は、正神と邪神を厳密に区別し、正気によって形成する正神に対する信仰を要求している。つまり、神道・儒教に対する信仰を強調するのである。人間は正神の信仰を通して自分に内在する神を認識して完璧な人格を求めることができる。日常生活の中で「中良振」を重視し、情を感じることを通して内在の神（未発）を感応する。注意したいのは、中良振は喜怒哀楽の情と関わり、日常生活の中の神道の実用性を強調することである。また、良頭は、理想的な君臣関係を中良振として認識し、理想的な政治論を論じている。良頭にとって神（神道・儒教）は日常生活、あるいは人間の倫理によって感じられる存在であり、日常生活に宗教性を求め、特殊な儀式だけではなく、神道を日常の中で持続することを提示している。以

上が良頭の神と神道実践の内容となる。

さて、垂加神道における気質について、竹内式部の『中臣祓講義』は闇斎、正英らの説に踏まえつつ、気質を利用し、穢を祓い、理想的な人格を求めている⁴⁶。良頭は、朱子学に基づいて気質を援用し、正神邪神論と結びつき、日用人倫の中の神道実践を重視している。闇斎没後、崎門朱子学と垂加神道へと分裂することになるとはいえ、神儒兼学への探求が依然として存在することが以上からは確認できる。闇斎の学問は、個人に対する関心にとどまらず、天下・国家に及んでいる。拙稿は紙幅の都合から言及することができなかったが、良頭の神の観念と近世国家との関係性については今後の課題としたい。

参考文献

- 跡部良頭『神代講談書』巻六（国立国会図書館所蔵、請求番号：834-22）
- 跡部良頭『神道軍伝書』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）
- 跡部良頭『神道天命之説』（京都大学附属図書館所蔵）
- 跡部良頭「神道排仏説」（『大日本文庫 神道篇 垂加神道 下巻』、春陽堂書店、1937年）
- 跡部良頭『正神邪神論』（東京大学文学部宗教学研究室所蔵）
- 跡部良頭写『天人唯一神道之伝』（筑波大学図書館所蔵）
- 大貫大樹「竹内式部『中臣祓講義』について―「人欲私欲」を中心に―」（『國學院雑誌 121（10）』、國學院大學、2020年）
- 久保隆司「「敬義内外」説と「神儒兼学」との関係性における闇斎神学の構造的理解について―主に「静坐」を通しての心身論的視点からの探求―」（『藝林 68（2）』、藝林会、2019年）
- 小林健三『垂加神道の研究』（至文堂、1940年）
- 呉震『朱子思想再読』（三聯書店、2018年）
- 澤井啓一『山崎闇斎』（ミネルヴァ書房、2014年）
- 佐伯有義「跡部良頭の伝附略年譜」（『大日本文庫 神道篇 垂加神道 下巻』、春陽堂書店、1937年）
- 朱熹『朱子語類』巻三（中華書局、1986年）
- 高島元洋『山崎闇斎：日本朱子学と垂加神道』（ぺりかん社、1992年）
- 田尻祐一郎「ある転向―徳川日本と「神道」」（『江戸文化の変容：十八世紀日本の経験』（百川敬仁ほか著）、平凡社、1994年）
- 谷棗山「甲乙録三」（『秦山集』十七、谷干城編、1910年）

谷泰山「保建大記打聞」（『日本学叢書 第二巻 保建大記（上）保建大記打聞（上）』、雄山閣、1938年）

谷省吾「“神は天地の心”・“心は神明の舎” —「会津神社志序」にあらわれている山崎闇斎の神の理解—」（『神道史研究』（32-1）、神道史学会、1984年1月）

谷省吾『失明の跡部良頭一特に「安座伝」の成立との関係』（『皇學館論叢 8（2）』、皇學館大学人文学会、1975年4月）

谷省吾『垂加神道の成立と展開』（国書刊行会、2001年）

玉木正英「橘家神代講説」（『橘家神道未公刊資料集 一』皇學館大学研究開発推進センター神道研究所、2022年）

陳栄捷「朱子之宗教実践」（『朱学論集』、学生書局、1982年）

伴部安崇「正親町公通卿口授」（『大日本文庫 神道篇 垂加神道 上巻』、春陽堂書店、1937年）

西岡和彦「垂加神道善悪考序説—山崎闇斎と大山為起—」（『季刊日本思想史（47）』、日本思想史懇話会、1996年）

松本丘「闇斎学派に於ける神儒兼学の展開：妙契と習合と」（『藝林 68（2）』、藝林会、2019年）

松本丘『垂加神道の人々と日本書紀』（弘文堂、2008年）

安川実「跡部良頭の回心について」（『国民精神文化』第七卷第七号、1941年）

山崎闇斎「会津神社志序」（『山崎闇斎全集』（日本古典学会編）、ペリかん社、1978年）

吉崎久「未発の祓としての「三科祓」」（『神道史研究』、神道史学会、1977年）

¹ 跡部良頭の実績については、小林健三『垂加神道の研究』（至文堂、1940年）、安川実「跡部良頭の回心について」（『国民精神文化』第七卷第七号、1941年）、谷省吾『垂加神道の成立と展開』（国書刊行会、2001年）、松本丘『垂加神道の人々と日本書紀』（弘文堂、2008年）等を参照。

² 佐伯有義「跡部良頭の伝附略年譜」（『大日本文庫 神道篇 垂加神道 下巻』、春陽堂書店、1937年、524ページ）

³ 小林健三『垂加神道の研究』、至文堂、1940年、509ページ

⁴ 小林健三の大著である『垂加神道の研究』（至文堂、1940年）は、垂加神道における跡部良頭の位置を論じて、「跡部神道」として解説していた。小林健三は垂加神道の発展の角度から跡部良頭の神道の思想を捉えている（小林健三『垂加神道の研究』、至文堂、1940年、475ページ）。その上で、小林健三は良頭が鹿島神宮に「垂加社」を創立することと良頭の著作『日本養子論』を論じた。小林健三は、前者において、「垂加社」の創立に関する史料を整理し、後者において、近世・近代日本における異姓養子の問題から、良頭の異姓養子支持論を

注目する（同書、521-541 ページ）。跡部良頭の思想展開について、谷省吾の『失明の跡部良頭一特に「安座伝」の成立との関係』（『皇學館論叢 8 (2)』、皇學館大學人文学会、1975 年 4 月、1-12 ページ）が跡部良頭の「安座伝」について論じている。また、田尻祐一郎は跡部良頭の祓い・敬に対する認識を説明している（田尻祐一郎、「ある転向—徳川日本と「神道」」、『江戸文化の変容：十八世紀日本の経験』（百川敬仁ほか著）、平凡社、1994 年、165-199 ページ）。先行研究は、良頭の修養論、生命観、倫理観を論じたが、日常生活の神道実践を注目しない。また、先行研究は良頭の思想の中で神儒兼学に関する検討が十分とはいえない。拙論は先行研究を踏まえつつ、神儒兼学の視点を含む、良頭における日常生活の中の神道実践を分析したい。

⁵ 良頭の引用史料について、

『神代講談書』巻六、国立国会図書館所蔵、請求番号：834-22、内閣文庫蔵写本、冒頭の部分に「丙午歳」（享保十一年）を記入される。最後には「享保十二丁未年十月吉辰書写之」という識語がある。

『神道軍伝書』、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵、写本、最後には「正徳甲午孟冬日、光海翁源良頭」という識語がある。

『神道天命之説』、京都大学附属図書館所蔵、写本、巻末には「正徳癸巳孟秋、光海翁識」という識語がある。

「神道排仏説」、『大日本文庫 神道篇 垂加神道 下巻』、春陽堂書店、1937 年、刊本

『正神邪神論』、東京大学文学部宗教学研究室所蔵、写本、巻末には「正徳甲午六月日 光海翁識」という識語がある。

『天人唯一神道之伝』、筑波大学図書館所蔵、写本、巻末には「岡田正利、長高、右光海翁之書也從小嶋長高士揮写之畢、延享四年丁卯四月七日、岡田宗殖」という識語がある。本書は岡田正利が小嶋長高の写本によって書写され、更に岡田宗殖によって書写されたものである。

⁶ 跡部良頭『神道軍伝書』、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵、第四丁裏-第五丁表

⁷ 跡部良頭『神道排仏説』、『大日本文庫 神道篇 垂加神道 下巻』、春陽堂書店、1937 年、344 ページ

⁸ 前掲注 7 書、353 ページ

⁹ 「妙契」は垂加神道の重要概念である。山崎闇斎は宇宙開闢の伝承が「古伝承」よりより伝承されていると考える。そして、中国においては、儒教というかたちで伝承される。日本の「古伝承」は神道の中に伝えられた（澤井啓一『山崎闇斎』、ミネルヴァ書房、2014 年、309-311 ページ）。また、久保隆司は、闇斎学派において、神儒の関係性は「神儒妙契」と表されるが、この「妙契」を媒介に、「神儒兼学」の視点を獲得し、統合的方法を構築したと考える（久保隆司「「敬義内外」説と「神儒兼学」との関係性における闇斎神学の構造的理解について—主に「静坐」を通しての心身論的視点からの探求—」、『藝林 68 (2)』、藝林会、2019 年、187 ページ）。

¹⁰ 松本丘「闇斎学派に於ける神儒兼学の展開：妙契と習合と」、『藝林 68 (2)』、藝林会、2019 年、80-82 ページ

¹¹ 谷桑山「保建大記打聞」『日本学叢書 第二巻 保建大記（上）保建大記打聞（上）』、雄山閣、1938 年、18 ページ

¹² 谷桑山の学問について、志水義夫は、日本の神道を主にして「西土の聖賢の書」を「羽翼」にすることを「学」の理想とすると論じている。そして、桑山は対漢意識の中で学問がつよく「日本」を打ち出している（志水義夫「神学、天学、日本学—垂加翁から谷重遠への学譜小攷—」、『藝林 68 (2)』、藝林会、2019 年、27 ページ）。

¹³ 跡部良頭『神道天命之説』、京都大学附属図書館所蔵、第四丁裏-第五丁表

¹⁴ 跡部良頭編「垂加社語」（『垂加翁神説』）『垂加翁神説 垂加神道初重伝』（村岡典嗣編）、岩波書店、1938 年、53 ページ。なお、『風葉集首巻』には「道大日靈貴之道、教猿田彦所導也」とする（山崎闇斎「風葉集首巻」『神道大系 論説一二 垂加神道（上）』、神道大系編纂会、1984 年、332 ページ）。

¹⁵ 前掲注 13 書、第五丁裏

- ¹⁶ 前掲注 13 書、第九丁裏-第十丁表
- ¹⁷ 陳栄捷「朱子之宗教実践」『朱学論集』、学生書局、1982 年、181-204 ページ
- ¹⁸ 前掲注 13 書、第五丁裏-第六丁表
- ¹⁹ 前掲注 13 書、第六丁表-第七丁裏
- ²⁰ 跡部良頭『正神邪神論』、東京大学文学部宗教学研究室所蔵、第一丁表-第一丁裏
- ²¹ 山崎闇斎「会津神社志序」『山崎闇斎全集』（日本古典学会編）、ペリかん社、1978 年、79 ページ。「会津神社志序」に関しては、谷省吾「“神は天地の心”・“心は神明の舎” — “会津神社志序” にあらわれている山崎闇斎の神の理解 —」（『神道史研究』（32-1））が詳しく説明している。
- ²² 西岡和彦「垂加神道善悪考序説—山崎闇斎と大山為起—」、『季刊日本思想史（47）』、日本思想史懇話会、1996 年、19 ページ
- ²³ 朱熹『朱子語類』巻三、中華書局、1986 年、55 ページ
- ²⁴ 呉震『朱子思想再読』、三聯書店、2018 年、425 ページ
- ²⁵ 前掲注 13 書、第三丁表-第三丁裏
- ²⁶ 田尻祐一郎「ある転向—徳川日本と『神道』」、『江戸文化の変容—十八世紀日本の経験』（百川仁敬他）、平凡社、1994 年、181 ページ
- ²⁷ 前掲注 20 書、第四表-第四裏
- ²⁸ 前掲注 13 書、第七裏-第八表
- ²⁹ 前掲注 20 書、第五丁表-第五丁裏
- ³⁰ 前掲注 20 書、第七丁表-第七丁裏
- ³¹ 玉木正英「橘家神代講説」『橘家神道未公刊資料集 一』、皇學館大学研究開発推進センター神道研究所、2022 年、153 ページ
- ³² 伴部安崇「正親町公通卿口授」、『大日本文庫 神道篇 垂加神道 上巻』、春陽堂書店、1937 年、252 ページ
- ³³ 谷秦山「甲乙録三」『秦山集』十七、谷干城編、1910 年、第十丁裏
- ³⁴ 高島元洋、『山崎闇斎：日本朱子学と垂加神道』、ペリかん社、1992 年、549 ページ
- ³⁵ 跡部良頭『神代講談書』巻六、国立国会図書館、請求番号：834-22、第三十一丁表-第三十二丁裏
- ³⁶ 前掲注 26 書、182 ページ
- ³⁷ 前掲注 7 書、350-351 ページ
- ³⁸ 前掲注 22 書、24 ページ
- ³⁹ 吉崎久は、『三科祓』の研究を通し、『三科祓』の中で儒教、特に『中庸』の中の概念を重視すると指摘している。儒教の未発を引用し、人間の意識を発動する前の状態（人間の本質）に対する追体験を重視することは『三科祓』の特徴である。（吉崎久「未発の祓としての「三科祓」」『神道史研究』、神道史学会、1977 年、83-99 ページ）良頭は、神儒兼学を重視している。また、玉木正英を通して『三科祓』の伝授を受けている（跡部良頭『三科筆記 外三種合綴』岡田正利補、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）。良頭が儒教の未発の問題が神道に持ち込むことが考えられている。
- ⁴⁰ 前掲注 34 書、546 ページ
- ⁴¹ 前掲注 34 書、551 ページ
- ⁴² 跡部良頭写『天人唯一神道之伝』、筑波大学図書館所蔵、第二十四丁表
- ⁴³ 前掲注 13 書、第十一丁表-第十二丁裏
- ⁴⁴ 前掲注 35 書、第三十二丁表-第三十三丁裏
- ⁴⁵ 前掲注 35 書、第十一丁表
- ⁴⁶ 大貫大樹「竹内式部『中臣祓講義』について—「人欲私欲」を中心に—」『國學院雑誌 121（10）』、國學院大學、2020 年、21-39 ページ